

株式会社 大山建工



2018年6月9日——八戸市西白山台の新築現場で、上棟式が行われようとしていた。屋根の上に立つ五色旗。内壁には紅白の垂れ幕が張られ、注連縄に囲まれた祭壇の前で、施主の家族と、大工たちが開始を待っている。足場に掛けられたシートの社名を見るまでもなく、八角形の丸太梁を架ける造りは(株)大山建工(五戸町、大山重則社長)の現場だ。設計は、建築家の前田伸治氏(前田伸治十暮らし十職一級建築士事務所代表、伊勢市)。太い南部赤松を組んだ伝統構法の木組みの力強さと、数寄屋建築の繊細な情趣が融した木造建築のM様邸は年末に完成する。

古式床しい上棟式披露

若手棟梁の「上棟の儀」

上棟式

M様邸

DATA

八戸市西白山台 2018年6月9日

■延べ床面積/60.21坪(199.05㎡)

■使用青森県産材/ヒバ(土台)、杉(柱、母屋、天井板)、赤松(床、梁、胴差)、樺(柱)、濡れ縁(栗)。

開始の太鼓が打ち鳴らされた。「あ、たいこだ！」と近所から集まっていた子供たちの声がかかる。太鼓の音が鎮まり、雅楽が流れ出すと、現場内は厳かな雰囲気包まれた。

神職が建築を司る神様に感謝し、工事の安全と建物の長久を祈る祭礼が「上棟式」。近年は簡略化され、行われるにしても施主と工務店だけの略式がほとんどで、宮司による正式な式典は珍しい。その上、このM様邸では、一般住宅では稀な大工



「上棟の儀」を仕切るのは26歳という若手の野村豊棟梁

「若手に大工としての誇りを持つてもらいたい気持ちもあつて行うことにしました。当社にいたる大工30人のうち、この現場に入っている16人のほとんどは20代の若手です。棟梁を務める野村豊はまだ26歳で、今年入社したばかりの女子の中村朱里あかりは20歳。こういう若手たちが、正式な上棟式を体験すること

たちによる古式床しい「上棟の儀」も披露される。そこまでこだわる理由を、大山重則社長はこう話す。



祭壇に向かい居並ぶ大山の大工衆(左端が中里政義棟梁)

で、伝統構法を引き継ぐ励みにしてもらいたい」

祭壇に向かい、中里政義棟梁を筆頭に「大山建工」の社名が染め抜かれた半纏をまとう大工たちが居並ぶ。東京・深川にある慧然寺「庫裡・書院」で棟梁を務めた(2017年)若手筆頭の細越克憲大工の姿もある。南部赤松を主体に青森県産材を使い今や全国に展開している『大山の家』を支える『大山の

大工衆だ。

野村大工が棟梁を務めるのは、M様邸で5軒目。若手成長株で、「26歳で『上棟の儀』を仕切るなんてなかなかないことです」と讃える前田伸治氏。野村大工は先輩の細越大工を目指し、細越大工は大先輩の中里棟梁(現代の名工)を目指す——そのようにして『大山の大工衆』は森の樹々のように育っているのだ。



「柱固めの儀」で幣を振る野村棟梁

柱固め、曳き綱、槌打ち 響き渡る掛け声と槌音

宮司による「祝詞奏上」が終了。そこから大工たちによる「上棟の儀」が始まる。

「大工、野村」

前田伸治氏の声が響いた。呼ばれて、野村棟梁が「おっ」と声を発して立ち、祭壇の前に歩み出る。えいっ、えいっ、えいっ……おうー。野村棟梁が幣を振る、

これが「柱固めの儀」。柱を指定の場所に固定する儀式だ。初めての体験だけに野村棟梁は緊張の面持ちだが、その中にも誇らしさが窺えた。我が子の晴れ姿に目を細めるような大山社長。先輩大工たちも見守っている。

続いて行われたのが「曳き綱の儀」。屋根の骨組みの上部(棟)に「棟木」を据え付ける様子を再現する儀式で、紅白の綱を手に参加者全員で棟木を引き上げるしぐさをした。その棟木が堅固に納まるよう槌を打



屋根の上からモチを撒く「散餅の儀」

ち鳴らすのが「槌打ちの儀」。棟梁に合わせて大工たちの大きな掛け声と槌音が現場内にも周辺にも響き渡った。

大山建工が最初にこの「上棟の儀」を執り行ったのは、慧然寺の「庫裡・書院」の上棟式。2回目(京都の大徳寺瑞峯院餘慶庵(2018年)。3回目がM様邸で、一般住宅として初となる。それだけ珍しいもので、取材に訪れたデリーー東北の紙面に幣を振る姿が大きく取り上げられた野村棟梁は、「身の引き締まる思いがしました」



隅餅をキャッチする中村朱里さん(大山建工初の女性の見習い大工)

とインタビューに答えている。

上棟式といえば、昔懐かしい
モチ撒きが浮かぶ。これが「散
餅の儀」だ。現場を遠巻きに眺
めていた子供も大人も近くに
寄り集まった。屋根に上がった
M様のご主人と大山社長、野村
棟梁が「それ」と餅を撒く。放
物線を描いて落ちてくる餅に
子供たちが歓声をあげて手を
のばす。拾う。次々にばらまか
れ、大人も童心に帰って拾い合
う。

小さな餅は撒けるが、大きな

餅はそうはいかない。家の四隅
に撒く「隅餅」は大きいぶん重
く、そこで大山社長が屋根から
名前を呼んだ。前に歩み出たの
は半纏姿の若い女性だった。

中村朱里さん。2018年

に入社した大山建工初の女性
見習い大工である。大山社長の
手から隅餅が放れた。それを、
膝をかがめてナイスキャッチ！
女性大工の成長を願う社長の
期待をしっかりと受け止めた。

大山社長は中村さんをこう

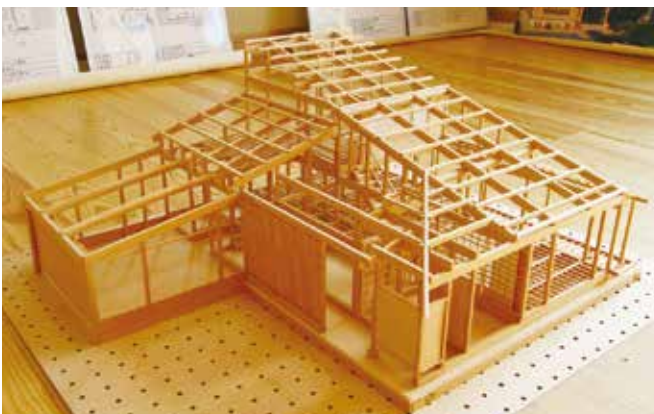
評価する。

「彼女は岩手の生まれで、二戸
の訓練校(職業能力開発校)に
入ってから大山建工の評判を
聞いたのだそうです。それで、
うちに入社したいと。中学生の
ときに東日本大震災に遭い、友
だちを亡くして悲しい思いを
したそうだけど、乗り越えた。
自分が女の子だなんて甘つたれ
た考えはこれっぽっちもないこ
とは顔つきに表れている。父親
も身内も大工という環境で
育ったから、職人の世界に
男も女もないという芯の強
さが身についています」

上棟式の模様を前田伸
治氏は後日、ブログ(「前田
伸治+暮らし十職」)でこ
う紹介している。

《儀式というものが次第に
行われなくなってきた、
淡々とした現場が多くあ
る中、こうしたはじめに皆
が集い、神事を通して心ひ
とつにすることも大事なこ
とだと思っ》

前田氏のブログには現場



M様のご主人が1年がかりで製作した現場の精巧な「構造模型」

の「構造模型」の写真が掲載さ
れていた。M様のご主人が製作
したものだと知って驚いた。建
築畑とはかけ離れた仕事に就
いているご主人が、前田氏の図
面をもとに、1年がかりで作っ
たものだという。それだけでも
目を丸める思いだが、図面通り
の木組みで、屋根勾配や柱や梁
の位置、ゆるやかなアールを描
く物置の丸太梁に至るまで寸



天井に現わしになった赤松の丸太梁が見るからに力強い

分の狂いもなく実際の現場と
ぴったり重なる精巧さ。これに
は前田氏も驚嘆した。
《……（施主と打ち合わせをし
た際）サプライズがある、と見
せられたのがこの構造模型だっ
た。実施設計を渡してから、こ
の1年を掛けて丹念に図面を
読み込み、部材の寸法に材料を



前田伸治氏が描いたM様邸のパーズ
(M様が製作した構造模型がこれにぴったり重なる)

削って自ら作った。見ればまさ
に図面通りの木組みである。感
嘆したと書けばあまりに簡単
で、とても言葉にできない感激
だった》
自宅を作るのに、これほど真
剣に取り組む人も珍しいので
はないか——。施主のその深い
思い入れにも応えたのが、この
日執り行われた「正式な上棟
式」であったのだ。
古来の儀式に魂が浄められ、
伝統と技術を引き継ぐ大工と
しての誇りが建築に宿る。

見るこころを伝える



株式会社 大山建工

- 本 社 ● 三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454
- 本 部 ● 八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>
- 内舟渡常設展示場 ● 八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055
- 盛岡営業所・展示場 ● 盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134



株式会社 大山建工



施主のM様が、(株)大山建工に依頼したきっかけは、八戸市の新興住宅地で『大山の家』を見かけたことだった。その家は何かが違う。周辺の家とはどこかが違う——「ご主人はそう感じたという。数寄屋建築の情趣と、太い丸太で組む『木組み』を融合させた『木の家』であった。日本建築の伝統を生かした家と、戦後生まれの『在来工法』による細い木と壁で建てた家との違いを、見る目の感性が察知したのだ。全国展開する前田伸治氏と大山建工による『大山の家』をご主人は博多にまでも自ら足を延ばして見学。深く思い入れを込めたM様が設計から3年がかかりで竣工した。

数寄屋の繊細さが融合

空間のダイナミクス

完成見学会

M 様邸

DATA

八戸市西白山台 2018年11月竣工

- 延べ床面積/60.21坪(199.05㎡)
- 使用青森県産材/ヒバ(土台)、杉(柱、母屋、天井板)、赤松(床、梁、胴差)、樺(柱)、濡れ縁(栗)。

建物の正面に杉の格子がある。その脇の玄関アプローチに入り、格子の端を左へ折れると、中庭とに挟まれた奥に玄関がある。視線の先に玄関を見せず、なんとなく向こうにありそ

うな予感を漂わせ、見えそうで見えない。そのような造りが奥ゆかしさを生む——数寄屋建築の繊細な風情を一般住宅に取り入れている建築家・前田伸治氏ならではの設計だ。



シンボルツリーとしてナツツバキが植えられている中庭。地窓を通して家の「外」と「内」が繋がる



赤松の八角形の登り梁が現わしになった勾配屋根



階段を上り下りしながら「外」にも「内」にも展開する“景色”がある

中庭にシンボルツリーとして立つ1本のナツツバキ。その背後の壁面に地窓がはめ込まれている。夜になればそこから室内の明かりが庭木にこぼれる光景が目に見えぬ。

玄関に入ると、床が靴で埋まつていた。11月下旬の連休の3日間、完成見学会が開催され、最終日の今日は、M様邸を設計した前田伸治氏の講演が行われる。盛岡からも見学者が

団体でバスで来ているそうだ。ホールに上がり、その右手に建つ格子戸の内側がリビング。格子戸越しに、太い丸太の登り梁が見えている。そのように視線の先を遮らず、次の景色に繋

げて人を誘うところが設計の妙だ。

見学者たちが立ち尽くすようにリビングの天井を見上げている。ダイナミックな空間に圧倒されたような面持ち。リビングだけでも約25畳。それがそのまま吹き抜けになっている。勾配屋根に現わしになった赤松の八角形の登り梁。リビングと対面式のキッチンと、その脇の窓辺のダイニングまで含めた広さは約33畳。さらに、緩やかに伸び上がる階段が1階と2階を繋ぎ、全体の大きな空間を引き締めるようにリビングに6寸角の檜の大黒柱が立っている。

丸太を組む“木組み”の構造が力強さを見せ、ダイナミックながらも、昔ながらの日本建築の情趣が融け合っている。前田氏が設計に込めた数寄屋の心を、そのとおりに細かく建築に反映させられる大工の技があったからこそできる空間づくりだ。

「生涯暮らせる家にした」と



6寸角の樫の大黒柱が大空間を引き締める

いうM様の要望に応えられるのは、「本物の木の家」。8mもある赤松の梁や、4寸角の目の詰まった（細かな）杉の柱を多用する前田氏の設計に見合う木を、大山建工が山に行つて伐り出すことから始まった。そこから材木店から木材を買



約25畳の空間がそのまま吹き抜けになっているダイナミックなリビング

う一般の工務店とはもう違う。8mもの梁なんてどこの材木店でも売っていない。大山建工では材料を自社で調達する。伐った木を加工場で製材し、乾燥させ、墨付けをし、手刻みして、建てる。伝統の技を引き継ぐ大工を、山の木のように育ててきているからこそできるのだ。

キッチンの上端に取り付けられた一枚板のカウンターに目が留まった。カウンターにしては狭いの

は、あえて出幅を控えたからだろう。「質素」な造りが数寄屋建築の旨とするところだ。目が付いたのは、そのカウンターの端である。板のコーナーをアーにして丸めているばかりでなく、木口にも貝の表面のような丸味ある面取りがしてある。この細部にまで行き届いた丁寧な仕上げ。柱にも大黒柱にも梁にも、建具にも手摺りにまでも面取りが施され、木肌の色合いと相俟つて、空間全体に柔らかさを与えている。

その「柔らかさ」は、「野性味」

とバランスがとれるように設計されているのだ。八角形の登り梁が添える野趣と、柔らかさが互いに融合している。それに加えて、登り梁の口径と長さ、胴差しの幅、柱や大黒柱の太さと高さ、掃き出しの窓越しに見える下屋の北山杉の桁や柱までも「寸法」のバランスが絶妙に図られている。そこまで配慮が至つてこそ、「上質な木の空間」は生まれるのである。

キッチンの背後から洗面室に行くことができ、奥の寝室に繋がっている。一方、コーナーにべ

レットストーブが置かれたリビングの続きには和風の土間があり、そこから玄関のアップローチに出られる回遊動線になっている。広くゆったりと感じられるのは、このように各空間が繋がっているからだ。

多目的ホールと子供部屋が続く2階を見学し終えた人たちが、階段を下りてくる。午前11時。前田伸治氏の講演が始まった。

赤松を建築材に生かす 八角形の丸太梁を組む

今から17年前、仙台に建てることになった数寄屋建築の住宅の仕事で、前田氏と大山重則社長は出会った。その施主は知り合いの工務店に依頼することに決めていたが、前田氏の設計を見て、辞退を申し入れてきたという。設計図通りにはとても建てられない、というのが理由だ。数寄屋建築が得意という評判を聞きつけて青森県の工務店の社長を連れてきたのは施主





濡れ縁の北山杉を使った化粧小屋裏が美しい。床は水に強い栗を使用



和の伝統美を演出する玄関アプローチ脇の格子



家の中からシンボルツリーが見え、夜になれば室内の明かりがツリーを照らす

本人だった。その社長と会って、驚いた前田氏は思わず、

「あら、大山（大山重則社長）さんじゃないの！ 実は大山さんとはそれ以前に京都の『財京都伝統建築技術協会』でお会いしていたんです。茶室を学びたいと大山さんはわざわざ青森から協会を訪ねて来られ、理事長の勧めで会員になつていました。勉強熱心な大山さんは、自社の大工さんや建具屋さん、左官屋さん、屋根屋さんらを連れて毎年1回京都へ伝統建築の視察研修に来ていました。そのときに案内役を務めたのが私なんです。まさか後々一緒に仕事をすることになろうとは思っていませんでした」

前田氏は、仙台の現場に使う木材の下見に大山建工を訪れる。その際、大山社長は自社の加工場（五戸町）だけでなく山へも案内した。ここでもまた前田氏は驚く。

「すごいなと思ったのは樹種が豊富なこと。たいていはどの県

も、杉だけとかの単一樹種で、昔ならサワラもあり栗もありのいろんな樹種があつて自然形態が成り立っていたのに今はヒノキしかない、といった状況になつている。ただこの青森の山には木が一杯ある。赤松、ヒバ、杉、ケヤキ、栗、檜、タモ……と豊かで、しかも太い木が残っている。まさに宝の山だ。その素晴らしさを、ここに住んでいる人にこそ分かつてほしいものです」

赤松といえばそれまでは製紙の原料として使われていた。建築用材としての使い方が分からなかったのだ。チップにするためにことごとく2mの長さで切られて製紙工場に持つて行かれる。山ごと買い占められていた。それがみんなチップに。冗談じゃない、もったいない使い方だ！——さて、いかに建築に使うか。前田氏が考え付いたのが梁であった。丸太の野性味を生かした八角形の丸太梁。それが『大山の家』のシンボルに

なった。

「ただこの赤松は、すごい“ねじれる”木なんです。木肌は滑らかで優しいが、とにかく暴れる。そういうクセがある。乾燥させて、削って、墨付けをして、刻んで、建てるまでに1か月くらいかかる。その間にねじれたり、曲がったりするんです。そういうクセを利用して大工さん（天井の登り梁を指さし）これをおそらくこういうふうにねじれるな、こう曲がるな、と木のクセを読む。それぞれ曲がる方向が逆の木を選んで、そのねじれを押さえ付けるように上から直角方向に梁を組むのです。これを“ねじ組み”と言います」

「このM様邸を建てた若手の野村豊棟梁をはじめ大山さんの

ところの大工たちはそういう木のねじれまで計算している。それができるからこういう建物が建つ、ということなんです」

自社で製材できる強み 柱や梁、鴨居、長押し

「大山の大工衆」といえども、最初からそこまでできたわけではない。前田氏と一緒に仕事をしてきたこの17年間に研究を積んできた。梁の組み方ばかりでなく、研究の成果は赤松のフローリングの敷き方にも見られる。

「今申しましたように赤松は収縮性が高いので、板を釘で止めると、バリバリと裂けてしまうんです。そこで、後からトントンと板の端を叩いて詰められるようにして1枚1枚張っているのです。長い年月の間に仮に隙間ができて、ある1枚を剥がして、そこから端をトントンと叩けば詰めることができる。そのようにアフターに対応できるように施工している。今では当

たり前にできるようにまりましたが、これも木のクセが読めなければできない大工の技なの

です」

大山建工の加工場には木材が山ほど積み重ねられている。樹齢1



リビングのダイナミックな空間に赤松、樺、杉の木肌が柔らかに融け合っている



2階も開放した空間として使えるように引き戸を建てている



天井に張った杉の羽目板1枚1枚にも色合いを統一する配慮が徹底している

00年とか150年とかの太くて長い木ばかり。だから長尺物が取れ、目が詰まった綺麗な材料が取れる。それを自由に使える。製材して残った材料は鴨居や長押、手摺りに使う。最後の細かい材料を建具に使う。大きな木を、隅々まで使うことができる。そういう山と建物が一直線で繋がった家づくりのシステムを作り上げたのだ。

「自社で製材するから安価にできるんです。ふつうの工務店に同じ内容で頼んだら、倍のコストがかかります。山持ちから樹木を買い、製材所に運んで柱や梁などに木取りをし、それを木材乾燥機にかける。それぞれの段階でコストが発生する。乾燥機から上がった木材だけが工務店に入ってくる。それまでのコストが相当積み上がってしまう。そうなるかどうか。コストが合わないからと妥協しているうちに、本来建てたいものとは違った家になってしまうのです」

窓を通じ外と触れ合う景色が暮らしを豊かに

建物の設計を考える前に、まず自分の敷地の「魅力」に目を向ける——これが前田氏の信条だ。この土地は何が魅力なのだろう。何かしらの魅力はある。その魅力を設計に生かす。こういう家に住みたいと、

そのことだけに固執してしまおうと決まったような間取りの家になりがちだ。

「家というのは『窓』を通して『外』と触れ合っています。日本の建築は、外の空間と、内とが触れ合って成り立っています。自分の部屋だけで完結するのではなく、小さな庭でも窓に面しているだけでぜんぜん雰囲気違ってくる。どれだけ心を和ませてくれるか。そういう小

さなところに配慮したプランだとすごく豊かな家ができるのです」

このM様邸は——玄関のアプローチから入って、格子を左に曲がると中庭が見え、真正面に玄関がある。玄関のところには窓があいていて、夜になると明かりが漏れる。玄関の扉を開け



リビング続きの土間。左の格子戸を開ければ玄関アプローチに出られる



玄関の中庭に面した壁にはめ込まれた地窓から庭が見える



対面式のキッチンからリビングの大空間を望む

で中に入る。ホールに上がり、格子戸を開けると、リビングがある。

「そこを歩くだけでも、そういう空間の展開があります。階段を上り下りしながらも窓越しにいろいろな風景が見える。家の中にもいろいろな変わる景色がある。繋がる景色が日々の生活を豊かにしてくれるのです」と前田氏は強調した。

生涯ここで暮らせる家を作ってほしい——M様から前田氏はそう依頼された。数寄屋建築と「木組み」の伝統を生かした『大山の家』でそれに応えた。宮司と大工による本式の上棟式を執り行ったのが6月。それから竣工までに半年かかった。それほどに使う木材が多く、1枚1枚、1本1本、手間をかけた造りであることを物語っている。

本物の木と大工の技で建てたからこそ、家族と共に家もまた住むほどにより良く成長していく。

みんなの住まいづくり



株式会社 大山建工

本社 ●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454

本部 ●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>

内舟渡常設展示場 ●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055

盛岡営業所・展示場 ●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134



NPO法人 あおもりの木で地域を支える 『伝統と技術』の会



日本文化は、木の文化だ。地域の山で育った木を、生きた素材として取り扱い、上等な建築を作る。その技や文化は、千二百年の京都の歴史の中で育まれ磨かれつつ継承発展を遂げてきた。伝統的木造建築において受け継がれてきた優れた工匠の技は、世界に誇りうる日本の文化遺産である。――数寄屋建築の大家として有名な中村昌生氏（京都工芸繊維大学名誉教授）はそう説く（2010年に八戸市で開催された「木と建築とまちづくりフォーラム」での講演「伝統を未来につなぐために」より）。

その、日本建築の匠の技を、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録――を指して運動が進められている。主体となっているのが、中村昌生氏が理事長を務める一般財団法人「京都伝統技術協会」と、一般社団法人「伝統を未来につなげる会」。2015年から京都、奈良、愛媛などで署名活動やフォーラムを展開している。登録に向けた機運を青森県にも高めようと2018年4月に八戸市で「八戸フォーラム」が開かれた。主催は、NPO法人「あもりの木で地域を支える『伝統と技術』の会」（八戸市、大山重則理事長）。大山氏が「京都伝統技術協会」「伝統を未来につなげる会」の会員という繋がりにから実現した。

- ユネスコ無形文化遺産
プロジェクト発足の背景**
- 日本の気候風土の中、木を植え、森を守り、資源を循環させる知恵と仕組み
 - 社寺・数寄屋・民家、橋などの木造建築を支えてきた職人の技術と知識
 - 庭園・石垣・橋など日本の景観とインフラを支えてきた土木技術
 - 地鎮祭など自然を敬う中で執り行われてきた建築に関する儀礼や慣習
 - 職人が使う鋸や鉋などの道具を作る技術
 - 茶道・華道など自然と暮らす「庭屋一如」の和の空間

八戸フォーラム

日本建築の匠の技を 世界無形文化遺産に

**建築文化途絶える危機
木造に係る職人に光を**

世界に誇る日本建築の匠の技を世界無形文化遺産に――「八戸フォーラム」のスタートが八戸グランドホテルの

大会場に掲示されていた。京都や岡山からの来賓、市民ら合わせて約200人が参加。この同じ会場の壇上で8年前、中村昌生氏が講演をしたのである（今回は高齢のため来賓が叶わなかった）。

フォーラムでは、「伝統を未来につなげる会」の大江忍事務局長が、ユネスコ無形文化遺産への登録を目指すことになった経緯や、文化庁がユネスコに正式申請する2019年3月までの要望活動について中村昌生



先駆け的な試みで建てられた「京都迎賓館」(E・Fとも)

理事長のメッセージを代読した。また、日建設計在職時に京都迎賓館を設計した佐藤義信氏（K U U ・ K A N 設計室主宰）が、京都迎賓館の「伝統的技術と現代技術を融合させた先駆け的な試み」について講演した。

要望運動の趣旨について、中村昌生氏はメッセージでこう述べている——「伝統木造技術を

取り巻く社会環境は大きく変化してきています。戦後の国の方針、建築基準法、また高度経済成長による産業構造の変化などにより、日本人の価値観や、生活スタイルにも大きな変化をもたらしました。さらには後継者不足と深刻な問題を抱え、このままでは民間で細々と継承してきた日本の木造建築文化は途絶えてしまう、という

危機感がありました。そこですべての木造建築に係る職人に光を当てて頂けないかと思いの運動を始めました」

2015年3月に「伝統木造技術文化遺産準備委員会」を立ち上げ、この運動のキックオフフォーラムを京都で開催。そのときは日本建築の匠の技・伝統構法をユネスコ無形文化遺産に、というスローガンで署名活動を行い、集まった3万1000人の署名を馳文部科学

大臣に届けた。

2017年には、日本の匠の技の保存活動を奈良、京都、高知、愛媛など各地で開催した。その運動の成果が実り、2018年2月に文化庁は、ユネスコ無形文化遺産の2020年の候補として、宮大工や左官などが継承する国内13団体による「選定保存技術」14件を「木造建築物を受け継ぐための伝統技術」として提案することを決定した。

大臣に届けた。2017年には、日本の匠の技の保存活動を奈良、京都、高知、愛媛など各地で開催した。その運動の成果が実り、2018年2月に文化庁は、ユネスコ無形文化遺産の2020年の候補として、宮大工や左官などが継承する国内13団体による「選定保存技術」14件を「木造建築物を受け継ぐための伝統技術」として提案することを決定した。



「京都迎賓館」について講演する佐藤義信氏

この選定保存技術14件とは——文化庁のリストにある選定保存技術のうち、「建造物保存修理」に関するもので、建造物修理、建造物木工、檜皮葺き、柿葺き、茅葺き、建造物装飾、建造物彩色、建造物漆塗り、屋根瓦葺き、左官、建具製作、手縫いの畳製作、日本産漆の生産、精製、縁付金箔の製造……などが含まれる。

「たしかにこれらは文化財を保存修理していく上で貴重な技術ではある」としながら、中村氏は、「しかし、これらの技術だけで日本の伝統建築が構成されているわけではありません。それは私たちが提案してきた範囲のほんの一部に過ぎず、該当する職人が限定的となってしまう」

中村氏が提唱する日本建築とは、庭と建物が一体となり調和がとれた「庭屋一如」の思想に基づく数寄屋建築なのだ。文化庁が今回申請した選定保存技術の中には、京都迎賓館を

作った技術者はだれも選定保存団体に属していないため含まれておらず（現代の名工の技術を受け継ぐ建築大工や左官などは大半が団体に属さない）、また庭園や石垣の保存技術も含まれていない。それから木造建築に欠かせない森林を管理している杣人の技術や、製材技術、また各職人が使う道具を作る技術も、和瓦も申請の範囲に入っていない。

そこで、提唱したのが「普請」という言葉。建築も土木も、庭園や石垣などの技術も含めた「普請文化」。そういう広い意味の伝統を包括する「普請文化」として、文化庁がユネスコに提案書を正式申請する2019年3月まで要望活動を進める方針だ。ユネスコで審議、2020年11月頃に登録が発表される。

中村氏は、「古くから日本の自然と調和しながら育んできた技術を、私たちの時代で途絶えさせることなく、森林資源の

活用も含めた総体の普請文化の伝統として未来につなげていくことは、日本の生活文化の揺り籠を守っていくことになるのです。オールジャパンの態勢でこの運動を推進していけるようご協力をお願いしたい」と呼びかけた。

匠目指す若者育てる 遺産登録を夢、励みに

続いて佐藤義信氏は講演で、「京都迎賓館」について知られ

ざる一面も交えて述べた。

海外からの賓客を「おもてなし」の心で迎え入れ、我が国への理解と友好を深めてもらうことを目的に建設された（2005年開館）のが京都迎賓館だが、国が発注する公共工事としては前例がない試みが採用された。「それは、一般競争入札から伝統的技術を分離して発注したことです」と佐藤氏。「一般競争入札の予算が全体の4分の3、あとの4分の1の予算を



青森県の建築文化に触れた参加者たち（㊦㊧とも弘前市の長勝寺）

分離して確保し、^{きりかぬ}截金や蒔絵、漆などの伝統工芸を人間国宝の工匠たちに発注した。そのことで非常に高いレベルの仕事を注入することに成功したのです」と強調した。

一方、建物の造りにも「先駆的な試み」が取り入れられている。日本建築なのだから和室は当然従来の日本間の寸法と思われがちだが、実は「大きい」。日本料理を楽しむ晚餐会場の「桐の間」の障子にそれが見られる。従来なら床から鴨居までの高さは5尺7寸、1 m 73 cmだが、2 mに高くしてある。

大柄な外国の賓客が鴨居に頭をぶつけないようという配慮からだ。その高い分、座敷からの庭の眺めが上まで見えてしまうのを、庇を長くして調整している。

「二見、普通の和室に見えるが、実は型破りな造りで、それでも日本間らしさを損なうことなく落ち着いて映るのは、すべてのバランスが取れているからな

のです」と佐藤氏は説明した。

フォーラム後の懇親会の挨拶で、大山重則氏(株)大山建工社長はこう述べた。

「今年、当社では初の女子1人を含む4人を見習い大工として採用しました。常に大工を育てていくことが大事と考えます。若者たちにとって、大工という仕事を極めた先が世界水準の高みに繋がっていれば、それは大きな夢になり、希望になり、励みになるはずで、大工の価値に光を当てることになる。遺産登録はぜひとも実現してほしい」

翌日、京都など遠方からの参加者約30人はバスで、奥入瀬溪流や十和田湖、八甲田山中の雪の回廊を経て、黒石市のこみせ、弘前市の長勝寺、弘前城天守を巡り、青森県の観光名所と建築文化に触れた。主催者の『伝統と技術の会』の「おもてなし」であった。

(中村昌生氏は2018年11月5日逝去。享年92歳)

おんたけのびまわりの



株式会社 大山建工

本社 ●三戸郡五戸町大字切谷内字淋代14-1
TEL.0178-68-3353 FAX.0178-68-2454

本拠地 ●八戸市大字河原木字千刈田7-1
TEL.0178-21-3055 FAX.0178-21-3033
<http://ooyamano-ie.jp/>

内舟渡常設展示場 ●八戸市長苗代字内舟渡84-13 産業道路沿い
TEL.0178-21-3055

盛岡営業所・展示場 ●盛岡市厨川1丁目21-30
TEL.019-601-7311 FAX.019-601-7134

